ウィリアム・モリス

5　ウェランド川

麗(うるわ)しのエレインはウェランド川のほとりを歩いていた
　岸辺に咲く百合の花を押し分けて
ああ　気高きロバート様　あなたは何て酷(ひど)い方
　こんなにも長く航海に出てしまわれるなんて

沼地を渡ってくるあなたの美しい真紅の旗を
　見た者は誰もいない
ああ　東方の民のことなど放っておいて
　わたしの金色の髪を思い出して

スタンフォード橋の向こうから
　街の賑やかな通りに向かってくる
愛しいあの方の旗が見えたなら
　それこそがわたしの待ち望む日

ああ　立派な旗を掲げた船を
　美しいスタンフォードの港に泊めて
東方の民の船など
　好きに行き来させればいい

日一日と過ぎるたび
　わたしの顔は青ざめていった
帯を留める金具の隙間は
　今では一インチほどにもなってしまった

昨夜　膝の上で
　帯を赤い絹の糸で縫い足した
わたしの心は悲しく沈んだ
　もう二度とあなたの顔を見ることはできないの

昨夜　床の上で
　帯を赤い絹の糸で縫い足した
わたしの純潔を捧げたその人に
　もう二度と会うことはできないの

しかし　エレインが窓辺に座り
　　金色の髪を梳(す)いていると　30
真紅の美しい旗が
　　スタンフォード橋を渡ってくるのが見えた

エレインは床に臥せっていたが
　　金色の靴は履いたままだった
エレインはサー・ロバートとその家来たちが　35
　　スタンフォードの大通りを馬で進んでくるのを見た

ロバートは眩いばかりの金色の上衣(うわぎ)をまとい
　　鋼の兜を被(かず)き
ケルン製の見事な剣も誇らしげに
　　踵(かかと)で強く馬に拍車をかけた　40

ロバートの横には　灰色の小馬に乗った
　　見目麗(みめうるわ)しい女がいた
エレインが身につけているルビーの
　　三倍ものルビーを身につけていた

ああ　腰まで届いて揺れるエレインの　45
　　金色の髪では敵わないのか
通りを進む女の髪は
　　膝の下で揺れていた

麗(うるわ)しのエレインは　深い悲しみのため
　　その顔は青ざめていた　50
一方　女の頬はばら色に輝き
　　幸せに満ち溢れていた

だが　エレインの窓の下を通りかかったとき
　　ロバートはむっとしてこう言った
「ああ　なぜあの青白い顔の女は　55
　　金色の布の影からわたしを見ているのだ」

側に寄り添う見目麗(みめうるわ)しい女が言った
　　「大方どこかの小娘が
この心地よい夏の日に
　　あなたの美しいお姿を見に来たのでしょう」　60

するとエレインが一輪の百合の花を

　ロバートの鋼の兜の上に落とした
「美しい騎士様　わたしは二匹の猟犬を飼っていました
　一匹は今でもわたしに仕えています

もう一匹は　今からちょうど一時間前　65
　海から帰ってきました
その毛並は艶やかで美しいけれど
　少しもわたしのことを覚えていないのです

美しい騎士様　わたしはどちらを手放しましょう
　わたしはどちらを手元におきましょう」　70
「ああご婦人よ　迷うことなく
　あなたを一番に愛する方を選びなさい」

「ああロバート様　あなたが側にいてくださらないから
　わたしはこんなにも苦しいのです」
「ベッドにお戻り　愛しいお前　わたしが海に出ていた間　75
　そんなにも辛い思いをさせていたとは」

「ロバート様　あなたが下さった贈り物のため
　わたしはこんなにも苦しいのです
愛する騎士様　どうかわたしを看ていてください
　わたしの息が続く間」　80

スタンフォード橋から六尋の海に
　ロバートは東方の女を置き去りにした
女ははらはらと涙を流して
　異国の地に連れてこられたことを罵った

ロバートが麗（うるわ）しのエレインに口づけすると　85
　エレインは穏やかな眠りについた
それからの長い長い月日
　エレインはロバートの家を守った

（宮原牧子訳）